



“へ短調の世界” — へ短調の名曲を探る



プログラム

クラシック音楽の場合、“調性”がその作品の性格を決定してしまうほど、重要な鍵を握っています。今日は“調性”を特集する新しいシリーズの第1回として、へ短調で書かれた名曲を集めてお聴きいただくことにしました。

ベートーヴェンのピアノ・ソナタ第23番は“熱情”という副題で広く親しまれ、古今のピアノ・ソナタの最高傑作のひとつに挙げられています。副題の“熱情”は、ハンブルクの出版商クランツが付けたものとされていますが、情熱的な激しい情感と強固な音楽的構築力はこの名に相応しいものと言えます。ブラームスのピアノ五重奏曲は、多くの改編を経て1864年31歳の時に完成させた作品で、綿密な技法とブラームス特有の哀愁と情熱が見事に散りばめられた、このジャンルを代表する名曲です。ウエーバーのコンツェルトシュテュックは、ピアノ協奏曲の形を取った表題的な協奏曲で、十字軍の遠征に行き離れている夫の帰還を待ちこがれる妻の不安と、再会を果たす喜びを描いています。華やかな技巧と劇音楽的な流れを持った独創的な名作です。チャイコフスキーの交響曲第4番は37歳の時に書き上げられた作品で、運命のファンファーレから始まり、輝かしい勝利で終わるといふ、ベートーヴェンの運命交響曲と同じように“暗から明へ”という構成を取っています。チャイコフスキーの交響曲の中では第3楽章の弦楽器はピッツィカートのみで演奏されるなど、変化に富んでいて、しかも最も情熱的な傑作です。今日は、へ短調の名曲をたっぷりお聴きいただきたいと思います。

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827):

ピアノ・ソナタ第23番へ短調op.57 “熱情”

アルフレード・ブレンデル (ピアノ)

(1993.9.21 ウィーン・ムジークフェラインサールでのLive)

★アルフレード・ブレンデルは1931年チェコ生まれで、2008年に引退した名ピアニスト。ウィーンで行われた連続演奏会でのライブ録音です。ただ熱いだけではないこの曲の本質に迫る演奏です。

ヨハネス・ブラームス (1833~1897):

ピアノ五重奏曲へ短調op.34 ~ 第1楽章、第3楽章から、第4楽章から

ジェルジ・シェベック (ピアノ) / クリーヴランド弦楽四重奏団

(1992.3.21 パリ、シャンゼリゼ劇場でのLive)

★ジェルジ・シェベックは1922年生まれ、1999年に亡くなったハンガリーのピアニスト。クリーヴランド弦楽四重奏団は1995年に26年間の活動を終えた名弦楽四重奏団です。シェベックは伴奏ピアニストという印象が強い人でしたが、70歳の時に録音されたここでのブラームスは、この名クワルテットと緊張感に溢れた素晴らしい演奏を繰り広げており、室内楽の醍醐味を味わうことができます。

*** 休憩 ***

カール・マリア・フォン・ウエーバー (1786~1826):

コンツェルトシュテュック (ピアノ小協奏曲) へ短調op.79

クラウディオ・アラウ (ピアノ)

ホルスト・シュタイン指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

(1982.3.18 ベルリン、フィルハーモニーホールでのLive)

★1903年チリ生まれの巨匠、アラウ79歳の時のライブ録音で、味わい深い演奏が聴かれます。

ピョートル・チャイコフスキー (1840~1896):

交響曲第4番へ短調op.36 ~ 第1楽章、第2~第3楽章抜粋、第4楽章

小澤征爾指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

(1988.5.30 ベルリン、フィルハーモニーホールでのLive)

★小澤得意のチャイコフスキー。その勢いに圧倒される名演で、この曲の魅力を余すところなく伝えています。